星野富弘さんの詩画集と、倭建命（やまとたけるのみこと）の物語

校長 沖田浩史

令和６年４月、詩人で画家の星野富弘さんが、78歳でお亡くなりになりました。

中学校の体育教師だった星野さんは、24歳のとき、器械体操の指導中に、誤って頭部から落下して頸髄を損傷し、首から下の自由を失いました。そして、約９年間、大学病院に入院することになります。絶望の底にあったとき、一緒に入院していた男子中学生から「帽子に一言書いて」と頼まれたことをきっかけに、口にくわえた筆で、花の絵を描き、その絵に詩を添えて詩画集を作り上げたのです。星野さんは、母親や妻に励まされ、支えてくれる人たちへの感謝の気持ちを込めながら、創作を続けました。

『花の詩画集 鈴の鳴る道』『かぎりなくやさしい花々』など、多数の著書があります。読んだことのある人も多いのではないでしょうか。

私も、これまで、国語やホームルームの時間に、たくさんの生徒たちに、星野さんの人生や作品のこと、周りの人たちの支えについて、紹介してきました。

〇神様がたった一度だけ この腕を動かしてくださるとしたら 母の肩をたたかせてもらおう
　風に揺れるぺんぺん草の実を見ていたら そんな日が本当に来るような気がした　（『新編 風の旅』）
〇辛いという字がある　もう少しで 幸せになれそうな字である　（『速さのちがう時計』）
〇いつか草が風に揺れるのを見て 弱さを思った　今日 草が風に揺れるのを見て 強さを知った
（詩画集『四季抄 風の旅』）

心身ともに困難を抱えた状態にあった星野さんからのメッセージに、私たちは、生きることの喜びや尊さを感じ取ることができます。また、星野さんが描く花の絵と詩は、物言わぬものの優しさに気付かせてくれます。

私たちに深い感動を与えてくれる星野さんの著書は、松山東高図書館に、３冊、置かれています。先日、２年生の図書委員さんと一緒に探してみました。星野さんのことを知らなかった人はもちろん、知っている人も、改めて星野さんの作品に触れてみてください。

令和６年６月の日曜日、松山東高校の東海支部の同窓会が名古屋市で５年ぶりに開催され、私も、校長として参加させていただきました。名古屋に行ったのは、生まれて初めてで、あいた時間に、名古屋城、名古屋大学、熱田神宮を訪ねることができました。

熱田神宮は、『古事記』に登場する「倭建命（やまとたけるのみこと）」が、尾張の国に置いていった「草なぎの剣（つるぎ）」をまつっている神社です。

倭建命は、西国を平定し、帰郷後すぐに、父親に東国征伐を命じられます。いろいろな人に助けられながら東国征伐を終えて帰ってくる途中、尾張の国で、美夜受比売（みやずひめ）と結婚し、そこに草なぎの剣を置いたまま、故郷の大和に帰ることになるのです。

草なぎの剣は、東国征伐の前に、叔母の倭比売（やまとひめ）から授けられた神聖な剣です。それを身に付けないまま帰る途中、倭建命は多くの災難に遭い、故郷に帰り着く手前で、亡くなってしまいます。その直前に詠んだ歌が、次の歌です。

〇倭（やまと）は国のまほろば　たたなづく青垣　山ごもれる　倭し　うるはし
〇愛（は）しけやし　我家（わぎへ）の方よ　雲居（くもゐ）起ち来も（たちくも）
〇をとめの　床の辺（とこのべ）に　我が置きし　剣の大刀（たち）　その大刀はや
（『古事記』新編日本古典文学全集による）

倭建命は、草なぎの剣を、わざと尾張の国に置いてきた、と読み取ることもできます。東国を平定して故郷に帰っても、父親に疎まれている倭建命は、またどこかに行かされてしまう、故郷に倭建命の居場所はありません。だから、覚悟の上で、草なぎの剣を置いてきたのではないでしょうか。そして、最期のときに心に浮かぶのは、目前にある故郷の自然と我が家、そして、美夜受比売のもとに置いてきた草なぎの剣のことでした。

いろいろな想像ができてわくわくし、感動する古典作品が、松山東高校図書館に置いてあります。私は、『古事記』のおもしろさを伝えたくて、国語の教員を目指しました。

学校図書館には、皆さんの人生を左右するような本があるかもしれませんね。